

## パリ国立自然史博物館を見学して

産学官連携研究機関

国際火山噴火史情報研究所 PD 研究員 藤 木 利 之

私は、2012年7月9日から13日にフランス共和国パリ市のユネスコ本部（UNESCO Headquarters in Paris, France）で開催された第21回国際放射性炭素会議（21st International Radiocarbon Conference）に参加した。この会議では口頭146件とポスター365件が発表され、総計46ヶ国、459名の参加者があった。この会議への参加にあわせて、フランス国立自然史博物館（Muséum Histoire naturelle）に属する進化大陳列館と植物園を見学してきた。この見学の目的は、私の所属する国際火山噴火史情報研究所で行っている情報収集・整理、そして、その活用方法を検討するためである。ここでは、見学した感想を報告する。

フランス国立自然史博物館は、ルイ13世が1635年に創設した「王室薬用植物園」を起源とし、1793年に一般に向けた博物館として正式に開館した。この博物館には植物園、動物園をはじめ、進化大陳列館、比較解剖学と古生物学陳列館、鉱物学と地質学陳列館、植物園の歴史展示室に大きく分けられ、その所蔵数はアメリカのスミソニアン国立自然史博物館とイギリスのロンドン自然史博物館に次いで世界第3位である。

進化大陳列館には海と陸上に生息する様々な生物が展示され、生物多様性を強く意識した展示になっていると感じた。1階は海に生息する様々な種類と大きさの魚のほか、貝やサンゴなどの無脊椎動物が展示され、やや薄暗く青みがかった海の中を、進化系統を学びながら見学することができる。地上となる2階以上は吹き抜けとなっており（図1）、2階のサバンナを闊歩するゾウやカバ、キリン、サイ、シマウマなどの動物の剥製標本が行進する大胆な展示は、来館者を圧倒する。ここで実際の動物の大きさなどが実感できる。

3～5階のバルコニーには生物と人間との関わりをテーマにした展示がなされている。人類が地球上



図1 吹き抜けとなっている進化大陳列館

の生物の恩恵を受け生活していること、また人類が生物を利用（栽培化・家畜化）することで、その生物がどのように変異したのか展示されている。また、その行き過ぎた利用や環境開発の影響により多くの動植物が絶滅や絶滅の危機にあることが紹介されており、そこには120体もの絶滅種・絶滅危惧種の貴重な剥製標本がガラスケースに大切に展示されている。人類がこれほど多くの動物を地球上から抹殺してしまった罪を再確認させられる。

見学中には幼稚園から高校生まで児童・生徒が先生に引率され課外学習で来館しており、ノートにメモを取りながら見学しているのをよく見かけた。フランスでは映像資料などよりも実物を見ることでさらに理解を深めることを目的とし、博物館が学校教育に非常に利用されていると実感させられた。日本の大学でも様々な研究成果を収集・整理、そして、



図2 間近に展示された動物剥製

活用する博物館施設が必要であり、市民と大学が触れあう場を提供することで、大学教育の裾野を広げられよう。

本博物館の特徴として、絶滅種・絶滅危惧種などの貴重な標本資料以外は基本的にケースには入っていない点がある。手を伸ばせば実際に触れることができるくらいの距離に展示してあるのだ(図2)。しかし、来館している幼稚園の園児でさえ、その標本に触る者はおらず驚かされた。見学時のマナーも教育されているのであろう。日本でこのような展示をすれば、標本はすぐにポロポロになることが目に



図3 絶滅危惧種のレバノンスギ

浮かぶ。

植物園にはヨーロッパで比較的良好に見かける植物をはじめ、絶滅危惧種となっているレバノンスギ(*Cedrus libani*)なども植えられており、種の保存としての役割も果たしているようであった(図3)。また園内の大温室には熱帯域の植物が植えられ、ジャングルの中を歩くようであり、ジャングルの階層構造を観察できるように工夫もされていた。さらにシダ・裸子植物の温室では、その植物の化石や進化の系統まで展示され、大進化陳列館との連携が伺えた(図4)。



図4 シダと裸子植物の温室展示

以上のように大変圧倒される博物館ではあったが、問題点があるとすれば1つ。それは説明がすべてフランス語であったことである。フランス語が解らない人には説明が全く解らない状況で非常に残念であった。

なお、今回の学会発表ならびに自然史博物館での情報収集には、文部科学省科研費(新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」、計画研究A01「年縞堆積物による環太平洋諸文明の高精度環境史復元」、代表者:米延仁志)を使用した。記して謝意を表します。